

## 幼稚園生活における子どもの表現

— ごっこ遊びにみられる音楽に関する表現に着目して —

### The Expression of Children in Kindergarten: Focusing on the Musical Expression in Pretend Play

荻原千史

OGIHARA Chifumi

#### 概要

保育者は子どもの活動に関して洞察力をもつことが重要であり、日々子ども理解に努めながら保育内容を立案し、展開させていくことが望ましい。現在報告されている幼児と音楽に関する研究においては、保育者養成の教育について論述される内容が多く、子どもを対象とした研究が十分でないとの指摘がある。本研究では、幼稚園生活にみられる子どもの音楽に関する表現に着目し、その音楽的特徴を事例を用いて明らかにするとともに、その契機や意図を考察している。その結果、“音楽に関する他者の表現を模倣し合うことにより、子ども同士のコミュニケーションが図られていたこと”、“模倣されやすい表現の特徴として、抑揚がついた言葉にはそれと関連のある動作を伴う表現が多い傾向にあったこと”、“遊びの段階と表現の豊かさが関連していたこと”が明らかとなった。

#### I. 研究の目的

これまで、幼児と音楽に関する研究において、様々な研究が報告されてきた。今川（2014）によると、その中でも保育者の技能や意識を問う研究報告が多く、対象も大人であるケースが多いことが明らかにされている。また、今川は同研究の中で、教員養成や保育者養成の教育内容を問うことと同時に、これらは子どもの研究が十分になされることが前提であることについても指摘している。保育者は子どもの活動に関して推察することに努めるのが重要であり、この部分が疎かになり保育内容を検討していくことは難しい。これを踏まえ、保育者は日々子ども理解に尽力しながら、保育内容にどのような活動を取り入れ、どのように子どもたちと活動を展開させていくのかを考えていくことが望ましいと考える。

そこで、本研究では、幼稚園生活の日常的な遊びの中で生まれた子どもの表現を取り上げ、表現する過程においての様々な育ちの契機や意図を考察することを目的とする。矢部（2011）の研究では、「1人の遊びの場ではなく、遊びの中で友だちとのかかわりが生まれる場において、自分の感情やイメージを他者に伝えたいという欲求が生じ、表現が生み出される」と述べている。従って、今回は特に記録にみられたごっこ遊びに注目し、その中の音楽に関する表現に着目して考察する。これにより、保育内容の前提となる子どもの活動の豊かさを描出することができる。藤田（1993）も、子どもたちの豊かな音楽表現を見出すためには、保育者が設定する音楽活動以外の何気ない日常生活のなかで音楽行動をみる必要があることを述べている。子どもの学びは日々の遊びの中で深められ、遊びを通して自らの興味・関心を追求し、周

囲と表現し合うことで徐々に自己が形成していくと考える。矢部（2004）によると、幼稚園生活にみられる幼児の表現につながる表出行為について、「表出行為は遊びの中、特にごっこ遊びの中から生まれている」とされている。ごっこ遊びにおいては、人間関係、言葉、身体表現、造形表現、音楽表現などの複数の要素が自然と融合しながら遊びが展開されていく。本研究においても、音楽に関する表現の音楽的特徴を明らかにするだけでなく、多面的に検討・考察していくこととする。

## II. 研究の方法

### (1) 観察対象

Y県X幼稚園の年少児から年長児の園児

### (2) 分析の方法

上記の幼稚園園舎内において、多くの園児が集まる広いスペースにビデオカメラを設置し、子どもたちの自由遊びの時間を撮影、観察した。撮影は、2018年11月13日の自由遊びの3時間行い、分析対象とした。

## III. 事例の検討と考察

撮影中およそ25分間繰り広げられた3名の3歳の女兒によるお家のごっこ遊びの場面である。最初は2名の女兒らが大型積み木を思い思いの場所に並べ、お家を造って遊んでいる。途中から1名の女兒が加わり、3名で遊ぶこととなる。作業が進むにつれ子どもたちのイメージが膨らみ、お家での生活の様子や物の配置などが徐々に設定され、遊びが豊かに展開している。この過程の中で、子どもたちからみられた音楽に関する表現をいくつか取り上げ、表現の生成に関して縦断的分析を行っていく。これにより、子どもの様々な育ちの芽を見て取ることができ、“表現の育ちの芽を備えた豊かな遊び”として捉え、子どもの遊びがいかに充実したものであるかを読み解くこととする。

1) オノマトペを用いた表現によって、周囲と意思の疎通を図ることがある。また、子どもの自由な表現の中から、日々の生活体験を理解することができる。

### 事例1

2人の女兒がお家の外枠をつくり、玄関先の設定と考えられる付近でやり取りしている場面である。その際、A児とB児がオノマトペで意思の疎通を図る様子がみられた。

B児：「ピンポンね、ピンポン。」

「ピンポンパンポンって。ね?」

[譜例1]

A児：「ピンポンパンポン。」

B児：「ここでね、ピンポンパンポンってなるから。」

A児：「ピンポンパンポン。」

B児：「お外になるから。」

B児：「駄目だよ。お外にいないでしょ。中でしょ。」

B児はオノマトペを用いて、A児に強く主張している。その後、A児がブロックの囲いの外に出ようとする、B児がそれを言葉や動作で阻む。すると、A児はブロックで囲われているお家の中へ戻っていく。

この場面では、玄関のインターホンについて、B児がA児に何度も確認をしている。その際に、どこにインターホンがあり、どのように使用し、どのような音が鳴るのかを体現して伝えている。伝えたいことを言葉で説明するのではなく、主としてオノマトペによる表現となっている。これに対し、A児が「ピンポンパンポン」と応答する。これは、B児が伝えていることに対して、A児が“分かった”という意味を示すため、チャイム音のオノマトペで再現していると捉えられる。しかし、他の場面では、女兒らが言葉で“分かった”というやり取りを何度も行っている。ここでの会話においても、単純に言葉で分かったことを伝えるのは可能なはずだが、A児はあえてチャイム音で応答している。岡林ら（2018）は、音と意味が結び付いているオノマトペについて「物事の様子を文章化して説明するよりも、短時間に鮮明な描写をすることが可能である。それゆえ言語習得過程の子どもにも理解が容易である。」と述べている。この場面においては、説明をするためにB児が困難を要すること、それをA児が理解する際に戸惑いが生じること等が予想される。これらのこ

とからも、オノマトペを用いた体現によるお手本を示す方が、お互いの意思疎通が円滑であったと言える。その後、A児はブロックの囲いの外へ出ようとするが、お家の中に居て欲しいというB児の想いによって、それは阻止されてしまう。しかしながら、B児の「お外になるから」という言葉によって、今度はお家の外から動作も伴って、ピンポンパンポーンの再現をしたいというA児の表現意欲の高まりに繋がったとみることもできる。

また、この表現は玄関のドアチャイムというよりは、多くの施設内放送で連絡やお知らせの用途として流すチャイムに類似している。但し、よく耳にするすべて上行音型（長3度－短3度－完全4度の音程による）のチャイムとは異なっている。B児はどこかでそれを耳にしたことがあり、B児独自の表現として新たに生まれたと考えられる。B児の表現するチャイムは、徐々に下行していく「ピンポンパン」の音程に続き、最後の「ポーン」の部分は一気に高音域へ上がる。既成のふしに独特の音程進行が用いられた表現が特徴的である。B児の後に模倣するA児も、この音程間をほぼ変えることのない模倣によって、理解したことの意志を強く示していると見て取れる。

さらに、動作の面から見てみると、B児は「ピンポンパンポーン」と発する際に指でブロックを4回触っている。この時、言葉の音程が変化する際には、それぞれ異なる位置を押す動作をしている。この行為がごく自然に行われていることから、B児においては、音の高さという概念に既に意識があり、楽器において触れる位置が変わると音高が変化するものがあることを何らかの形で理解していることがわかる。しかしながら、鍵盤ハーモニカ等のような音高順に鍵盤が並んでいる楽器と同じ位置を押しているようには見えなかったため、音階のある楽器の経験は少ないことが予想できる。ここで述べたいのは、音高の理解や楽器経験値の有無について保育者が把握する必要があるということではない。自由な表現の中から、子どもたちが日々どのような体験をし、どのようなことに興味・関心を示し、どのようなことを感じ考えて過ごしているのかを捉えていきたいということである。子どもの生活体験を知るといことは、それと同時に個々の子どもへの理解をいかに深められ

るかということに繋がっていくと考える。



2) 拍節感をもつ表現によって自らの感情を示すことがある。また、表現の模倣によって、周囲と感情共有を図ることがある。

#### 事例2

事例1の後、新たにC児が合流して3人で遊んでいる。お家がある程度形づくられ、ごっこ遊びが楽しめるようになった頃、女兒らがお家の中でジャンプをしたり、並べた積み木の上を歩いたり始めた。その際に、A児が発する言葉と身体の動きが一致し、感じたことや気づいたことを自分なりに表現している様子がみられた。

C児：「○○ちゃんちー（A児の名前）、もう寝る時間だよー。」（走ってくる）

A児：「ここ寝る場所だよ。」

C児：「寝る場所、待って。○○ちゃん（C児の名前）の寝る場所ある？」

B児：「あるよ。○○ちゃん（C児の名前）の寝る場所、ここ。」

C児：「ここ？大きいね。」

B児：「うん。」

C児：「ねこは？」

B児：「ねこ？ねこちゃんはここだね。」

A児：「ニャン、ニャン。」

C児：「水筒。」

B児：「お水。」

C児：「ありがと。」

3人：「あははは。」

B児：「お絵描き、クレヨン。」

A児：「ジャンプ～、ジャンプ～、ジャンプジャンプ。」[譜例2]

3人：「あははは。」

B児：「ジャンプ～、ジャンプ～、ジャンプジャンプ。」

A児：「ジャンプ、おっと。」

C児：「よいっしょっと。」（ジャンプ時）

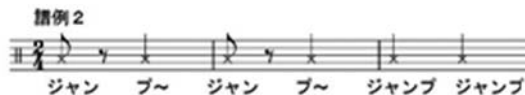
A児が言葉と動作で表現する様子を見て、面白そうに3人で笑う。すると、この表現をB児が真似る。続いて、C児が言葉ではなく、ジャンプという動作で真似て積み木から降りた。

A児が他の女兒らの言葉に反応を示し、「ジャンプ～、ジャンプ～、ジャンプジャンプ」と言葉が発しながら、手を上げたり、体を揺すったりと言葉と身体の動きを拍節感をもって表現している。この場面では、寝床の設定、ベットと思われるネコの居場所設定、飲食に関するものの設定など、実際の家が存在するものの様子が具体化されてきている。A児のこの表現は、一見それ以前の会話

との繋がりが感じられないように思える。しかし、ジャンプという動きは、喜びの感情を示す際に表出されることが多い。A児の表現にもこの感情が込められている可能性は高いと考える。ここではC児が遊びに加わったこと、それにより遊びの内容が深まってきたことが見受けられる。このことから、A児のこの遊びに対する楽しさや嬉しさのような想いがこの表現に込められていると考えられる。

また、4回発するジャンプという言葉には等速が感じられ、その中の始めの2回と後の2回ではテンポが異なり、後半が速くなっている。テンポを速めていく表現というのは、音楽において高揚感を高めていく時や与える時に用いられることが多い。ここではA児の高揚する感情が溢れ出たために、この表現方法に繋がったと捉えることも可能である。これに加え、人が強く主張したいことは何度も繰り返されること多く、特定のモチーフが執拗に繰り返されることで得られる高揚感もあると考える。この表現においても、同じ言葉と動きを何度も繰り返すことから、喜びという感情を非常に強く示したいと感じ取ることもできる。

言葉と動作によってA児が表現した後、共に遊ぶ女兒らもこの表現をそれぞれの方法で模倣し、表現していた。B児の表現は言葉も動きもA児の模倣となっていたが、C児の表現はジャンプを用いる点ではA児と似ているものの、動作や言葉は異なっていた。人は相手の気持ちを誘う時、相手に模倣してほしい時などに語尾を上げる表現を用いることが多い。A児の発するジャンプという言葉も、まさしく語尾が上がり抑揚が強調されているのが特徴的である。これによって、共に遊ぶ女兒らの表現したい気持ちが触発されたとも考えられる。



### 事例3

事例2の直後の場面である。3人の女兒がB児・C児・A児の順で一列になり、並べたピンク色と茶色の積み木の上を歩いている。そんな中、B児とA児が言葉を発しながら歩く様子が見られた。

B児：「ピンク。」

A児：「ピンクへ、ないないないない、ピンクへ、ない。」

C児：積み木から落下

A児：「大丈夫？」

C児：首を縦に振る

ピンクの積み木の上を歩く際は「ピンク」と発し、茶色の積み木の上では「ない」と発している。その後、凹凸のある積み木を跨いで越えようとするが、C児がバランスを崩して積み木から落ちてしまう。A児は心配して声を掛ける。

この場面においても、仲間と表現を共有する姿がみられた。始めにB児が積み木の上に乗る、「ピンク」と自分が乗っている積み木の色を口にした。A児がそれに反応し、自分の乗る積み木の色を「ピンク」と「ない」の二語で表現する。「ない」という言葉は、茶色の積み木に対して「ピンクではない」という意味が込められているようである。色に反応することの楽しさを、気づいたまま口にすることで強く実感しているようにも見て取れる。

また、A児の発する言葉と歩くタイミングがびたりと合わさっている瞬間が見受けられる。これは目にしたものに対する気づきに触発されて、それに一致する言葉と動作による一つの表現につながっている事例であると考えられる。この積み木の上を歩くという様子はこれ以前の場面でもA児とB児によって行われている。以前はB児の発した「この上で遊ぶんだよ」という言葉に対し、A児が「この上で遊ぶ」と言いながら歩くのみで、自らが気付いたことを口にする様子はなかった。しかし、この場面では積み木の色への気付きを言葉にしながらかくようになり、子どもたちの表現の幅が広がっているのがうかがえる。活動が発展していく過程で創造力が深まり、それと同時に表現方法も多様化されてきたと推測することができる。このように、言葉のリズムと動きという表現を分かち合うことを通し、子どもたちはお互いに感情の共有を図りながら遊びを楽しんでいると推察できる。

3) 芽生えた感情をつくりうたに発展させて表現することがある。また、表現からイメージを共有することで、新たな遊びの要素が生まれていく。

#### 事例4

事例3の続きの場面である。C児が積み木から落ちてしまった後、保育者が近くを通りがかり、C児が保育者に話しかける。B児もそれに聞き入る。その後、A児は2人に対して声を掛ける。また、C児も2人に対して、次に記したような歌をうたって心境を表現する様子が見られた。

A児：「ここがテレビみるとこ、わかった？

テレビ。」

B児：「ピッ。」

A児：「プリキュア楽しいね。」

「待って、お母さん、お料理がないよ。」

「おりょうり〜、おりょうり〜。」

B児：「わかった。」

C児：「おりょ〜うりががないよ、おりょ〜うり

がないよ。」[譜例3]

B児：「お用事？」

A児：「お用意？」

A児はごっこ遊びの中にお料理を取り入れたい様子で、「おりょうりががないよ」とB児に問いかける。それを聞いていたC児は、その言葉に抑揚を付けながら繰り返し口ずさむ。そのうち、その心境を音にのせ、つくりうた(2013坪能・加藤)に変化させて表現した。その言葉にB児とA児が反応・模倣し、お家遊びを再開する。その後、お料理ではないものの、A児以外にもおやつに関する話が出され、さらに遊びが発展していった。

この場面では、事例4でC児が積み木から落下し痛い思いをしたことで、遊びから気持ちが少し離れてしまった様子が見受けられる。そこで、C児は近くを通りがかった保育者に別の話題で楽しく話し始める。その様子につられて、B児の気持ちも保育者との会話に向いていく。A児はその様子を確認しながらも、C児が落下したことで崩れてしまった積み木を整える。A児は、保育者が別室にいった際に、2人に「ここがテレビみるとこ」と話しかける。これにC児は興味を持ち、「ピッ」というオノマトペを用いてテレビのスイッチを押す動作を行い、「プリキュア楽しいね」というA児の言葉に頷きつつ、再び遊びに戻る。これ以前の場面でも別の場所でテレビを用いて遊んでいたが、その際にはテレビのスイッチを手で押す動作のみで、「ピッ」というオノマトペの表現はなかった。具体的な番組名が出てくることなども鑑み、ここでもA児の表現の幅が広がったことは明らか

である。一方のB児は、A児の言葉に反応するも、別室に行った保育者の方をまだ見ていた。B児はもう少し保育者と話したかったのだ。そんなB児の様子に気づいたA児は、B児にお母さんという役割を授けて、「お母さん、おりょうりががないよ」と遊びに気持ちが戻るよう新たな設定を提供したように見える。これに反応したかのように、B児は遊びへと気持ちが戻り、3人でお家遊びを続けた。

また、お料理があったら良いこと、3人で遊びを続けたいこと、これらのA児の想いにC児が同意した様子で、その気持ちを「おりょうり」という一語文に抑揚をつけて口ずさんだ。その後、「おりょうりががないよ」という一文で音程の明瞭なうたに発展させて表現した。意識的に行っている様子はなく、芽生えた感情からまた新たな表現方法が自然に形成されている。しかしながら、これに対して、B児とA児が「お用事?」「お用意?」と聞き返している。A児は、自分の発言したことにC児が反応してうたが派生したことに気付いていない様子である。

さらにその後、お料理ではないものの、「おやつを買いに行こう」「これ、おやつだよ」「プリンおやつにして」「お家帰っておやつ食べる」などとA児以外からおやつ話題に発展し、新たな遊びの要素が生まれた。これらは気付いたこと感じたことをお互いに表現し合う中で創造力が育まれ、A児の感情やイメージも自然と3人で共有されていったと推察できる。



4) 複数の表現を用いることによって、周囲に自分の要求を強く伝えることがある。

#### 事例5

B児が別室の様子を見に行き、A児とC児の2人で遊んでいる場面である。お家に入ろうとするB児に向かって、A児が話しかけている。

A児：「ねえ、〇〇ちゃん（C児の名前）、

脱いで脱いで。」

「上履き履けないよ〜。」

「ピピピピピピピ。」

「ピピピピピピピピピピピピピピピ。」

A児は上履きを履いたままお家をジャンプで横切ったC児を見ながら、頭を掻いている。C児に何か言いたそうな様子だが、それを表現するまでには至っていない。

この遊びにおいて、A児は園内で使用する上履きを外履きとして見立てている様子であり、上履きを脱いでからお家の中へ入ってほしいと考えていると推測できる。そのため、上履きを脱がずにお家に入ろうとするC児に向かって、いくつかの表現を用いながら自らの考えを主張しているのである。「脱いで」という言葉に始まり、「上履き履けないよ」、最後には交通整備等で通行を制止する際に使用される笛の「ピピピピ」というオノマトベ、さらには入ることを阻止するような手の動作を用いて表現し、何度も考えを主張している。しかしながら、C児は上履きを脱ぐことなく、お家の中を横切っている。これに対しA児は納得がいかない様子で、頭を掻きながらC児を見つめる。C児の取った行動に対して感じたことを本人に伝えようか伝えまいか迷っている様子に見受けられる。幼児期には、同じ表現を繰り返す行為はよくみられる。しかし、この時のA児からは、その強い思いからいくつもの表現方法が自然と生み出され、それらを駆使してC児に思いを伝えたと考えられる。

#### IV. 総合考察

本研究では、ごっこ遊びの中で子どもたちのどのような表現がみられ、その表現にはどのような意図が感じられ、どのような過程を経て育まれていったのかを音楽表現の視点を中心にして分析した。保育者によって見解は無限とも言えるため、ここでの分析はあくまで一考察である。検討と考

察を行っていく中で、子どもの活動が"さまざまな育ちの芽を備えた豊かな遊び"であることを再確認できた。その結果、事例1～5の表現の生成過程において、次の3点が明らかになった。

第一に、“音楽に関する他者の表現を模倣し合うことによって、子ども同士のコミュニケーションが図られていた”ことについてである。事例1では、B児はA児に対してインターホンについて説明したいのだが、オノマトベが中心で伝えたいことをなかなか思うように表現することが難しい様子であった。このように、幼児期には伝えたいことがまだ明確に表現できず、もどかしさを抱えながら相手と何度も同じようなやり取りが続くこともある。しかしながら、何度も続くB児の表現にA児は毎回丁寧に応答し、その表現と一緒に楽しんでいた。考察の結果、B児の説明に対し、A児が分かったということ伝えるために、相手の表現を模倣していると捉えた。事例2においては、A児が気持ちの高揚を表現するために、抑揚のついたジャンプという言葉と動作を拍節感をもって表現しており、B児がそれに同調したようにA児の表現を模倣する。これにより、A児が示した喜びの感情表現をB児が受け止め、自分も同じ気持ちであるという意思を表出していると推察できた。子どもたちは、日々このようなやり取りを何度も繰り返す。その過程で、徐々に伝えたいことがわかりやすい言葉や動作等に変化し、豊かな表現力を身に付け、それがコミュニケーション力の高まりに繋がっていくのである。

第二に、“模倣されやすい表現の特徴として、抑揚がついた言葉にはそれと関連のある動作を伴う表現が多い”傾向にあった。幼稚園生活にみられる幼児の表現につながる表出行為として、矢部(2004)の研究によって「言葉に抑揚をつけたり、既製のふしを思い出すだけではなく、動きを伴った場に生まれるということ。」が明らかにされている。本観察においても、これらのことが多くの場面で確認できた。事例1・2においては、ふしや抑揚のある言葉に動作が伴った表現となっており、これをA児とB児がお互いに模倣表現している。しかし、事例4においては、C児に動作はみられるものの、歌いながらブロックを運んでおり、ふしに関連のある動きが伴う様子はみられない。

加えて、表現に対し他児による反応はあるものの模倣は行われていない。このことから、身体の動きを伴う表現は伴わない表現に比べ、模倣への欲求に繋がること、模倣しやすいことが推測できる。模倣にかかわらず様々な方法で、他児の表現に触れ、互いに共有することは重要である。この重要性については、多くの研究者によって述べられていることであるが、本研究のほとんどの事例においても、子どもたちは共に遊ぶ仲間の表現を共有している姿がみられた。共有方法はオノマトペや拍節感をもつ言葉と動作による表現の模倣、つくりうたによる表現など様々であったが、友だちの表現を目の当たりにすることで、発想力や創作力が刺激され、自己の表現力が広がり、遊びへの探求も深くなっていった。また、表現の共有によって他児と心を通わせることは、他者の気持ちを理解する力、思いやる心の育成にも繋がっていくと考える。

第三に、“遊びの段階と表現の豊かさが関連”していたことである。お家のごっこ遊びを始めた初期の段階では、他者の表現をほとんど変化させることなく模倣表現しており、表現の方法が比較的シンプルであった。これに対し、遊びの内容が深まってきた段階では、他者の表現をそのまま模倣するのではなく、オリジナルに近い形に変化させて表現していた。取り上げた事例においても、事例1・2ではお互いの表現をほとんど変化させることなく模倣し合っている。それに比べ、事例3・4では、他者の発した言葉をキーワードに、模倣ではない新たな表現へ派生している。また、事例4・5においては、他者の感じていること、考えていることを推察しながら、自らの表現に至っているように見受けられる。さらに、事例5では、一つのことを伝えるのにも、いくつもの表現方法を駆使している。このことから、表現は繰り返し行われることによって、模倣から少しずつ派生し、新たな自分なりの表現となって表出され続け、いくつもの遊びの段階を経て豊かなものへ発展していくことが考えられる。

#### 引用文献

- ・今川恭子(2014)「幼児と音楽をめぐる質的研究の現在」音楽教育学第44巻1号p.33
- ・矢部朋子(2011)「幼児にみられる音楽的表現の共有過程」保育学研究第49巻第2号
- ・藤田芙美子(1993)「子どもはどのように音楽的であるか」(乳幼児のための音楽教育)音楽教育学pp.55-64
- ・矢部朋子(2004)「幼稚園生活にみられる幼児の表現につながる表出行為—フィールドワークを通して—(2表現の原理と過程,I表現活動の展開)」学校音楽教育研究第8巻p.112
- ・岡林典子・佐野仁美・坂井康子・難波正明・南夏世・山崎菜央・深澤素子(2018)「領域「表現」と小学校音楽科をつなぐ音遊びの可能性—「マラカス作り」によるオノマトペ表現と協同性の成り立ちに注目して—」京都女子大学発達教育学部紀要第14号p.116
- ・坪能由紀子・加藤恵利子(2017)「幼児のつくりうたの音楽的構造分析：A幼稚園での事例をもとに」日本女子大学大学院紀要23号 p.236

